

第3回ランピースキン病対策検討会議事概要

(令和6年12月26日開催)

1 福岡県、熊本県における発生の疫学

- (1) 国内への侵入経路については、ランピースキン病（以下「本病」という。）ウイルスを保持した吸血昆虫が、周辺国から風により、又は船舶等に運ばれ我が国に侵入し、本病の感染を引き起こしたと考えられる。
- (2) ウイルスゲノムの一部領域（RP030:606bp）の解析では、我が国の本病ウイルス株（福岡1～9例目、熊本1例目）は、中国、台湾、韓国株を含むアジア流行株と100%一致。
- (3) 国内での感染拡大要因の大部分はサシバエ等吸血昆虫によるものと考えられるが、熊本の1例目（国内3例目）については、福岡県の発生農場から導入された牛に起因する。
- (4) 福岡県17例目（国内18例目）については、福岡県の主な発生地域から約35km離れた農場での発生であったが、これはサシバエ等吸血昆虫が車両等に迷入し遠隔地まで運ばれた、又は発生地域から風により飛来した可能性がある。
- (5) アジア流行株は従来の株に比べ、接触感染能が増強されているという海外からの報告があるものの、主たる感染経路については、従来の株同様吸血昆虫である。
- (6) 早期自主淘汰、ワクチン接種、吸血昆虫対策等現行の対応に加え、気温の低下によりサシバエ等吸血昆虫が不活発化し、本病は沈静化傾向にあると考えられる。他方、本病の病態については不明なところがまだ多く、春先以降の本病の発生状況については予断できない。そのため、冬季のうちに自主淘汰とサシバエ等吸血昆虫対策を徹底することが重要。

2 これまでの防疫対策の検証

- (1) 本病の発生機序や治癒の経過については不明な点が多いことから、引き続きデータを収集し、必要に応じ検証及び見直しを行う必要がある。
- (2) サシバエの活動が活発化する春先以降に感染拡大リスクが高まる可能性が高い。このため、副反応の出現等、本病ワクチンの特性を生産者に丁寧に説明した上で、地域ぐるみでワクチン接種を推進することや、サシバエ等吸血昆虫対策を徹底することが必

要。

- (3) ワクチンが接種され3週間経過した子牛において、臨床的な異状がない場合には、その子牛が移動先に本病をまん延させるリスクは低いと考えられる。